

# 大学入試方法による学生の違い

## ——出身高校ランクによる異質性

小野塚祐紀

(小樽商科大学准教授)

大学は学生の人的資本蓄積の場として労働力輩出に重要な役割を果たしている。その蓄積は、大学入試制度により決定される。学生と大学の組み合わせに影響を受ける可能性が高い。本論文では、大学生の個票データを用い、高校生時点での特性、大学内外での態度・活動、大学でのパフォーマンスという3つの観点から、学業面を中心とした様々な面において、筆記試験入試入学者と推薦・AO入試入学者の間に違いがみられるかを分析する。大学入試難易度により推薦・AO入試が果たしている役割が異なる可能性から、この記述分析では出身高校ランクによる異質性に着目する。分析の結果は、学生がなぜ推薦・AO入試を利用しているかが出身高校ランクによって異なる可能性を示唆している。そして、難関大学への進学者が多い高校出身の推薦・AO入試入学者は、入学後の勉学への自主性や社会活動について望ましい特性を持ち、大学でのスキルの成長も大きいと評価している。しかしながら、どのランクの高校出身であっても、授業へのまじめさ、大学への満足度は推薦・AO入試入学者のほうが同ランク校出身の筆記試験入試入学者よりも高い傾向がみられ、本研究で使用した指標の限りでは、大学での態度や成績で劣っている証拠はみられない。推薦・AO入試に対する近年の社会的な低評価は、推薦・AO入試を導入している大学の割合が偏差値の低い大学で高いことが主要因であると思われる。

【キーワード】 その他

### 目次

- I はじめに
- II データ
- III 分析
- IV まとめ

### I はじめに

大学は学生の人的資本蓄積の場として労働力輩出に重要な役割を果たし、大学進学率の上昇と共にその重要性は増々高まっている。大学で教えられている内容や大学の雰囲気といったものは大学によってさまざまであるため、大学における人的

資本の蓄積は学生と大学の組み合わせに影響を受ける可能性が高い。「誰が大学に行くのか」と「誰がどこの大学に行くのか」という、学生の選抜と配置を決める大学入試制度は人材育成の観点から社会にとって重要な問題となる。

日本における大学入試方法は、一般入試に代表されるような、筆記試験によって学生を評価する方法が主流である。しかし、この入試方法は筆記試験で測られる「現在の学力」に過度に依存しているとの批判を受け、過去数十年に渡っては推薦入試やAO入試といった、調査書、志望動機書、面接などを通じて多面的・総合的に学生を評価する方法が広まってきた。文部科学省「平成30年

度国公立大学入学者選抜実施状況」によれば、大学入学者のうち、一般入試で入学した者が54%、推薦入試で入学した者が35%、AO入試で入学した者が10%となっている。今や推薦・AO入試を利用して大学に進学した者が半数近くを占めているのである。

推薦・AO入試と筆記試験入試は、学生評価の方法だけではなく、実施時期も異なっている。推薦・AO入試の方が早くに行われ、基本的に専願である。つまり、推薦・AO入試で合格した者のほとんどは筆記試験入試が始まる前に進学先が決定する。このように、日本では評価軸と時期の両面で異なる入試方法が並立しており、入試方法によって進学している学生に違いがあるだろう。評価軸が違うことで学生は自分自身がより高く評価される入試方法を選ぶ。例えば、高校の成績が良い学生や、志望動機書や面接などで大学への熱意を伝えられると考える学生は推薦・AO入試を選び、他方で筆記試験に自信がある者は筆記試験入試を受けるだろう。危険回避度が高い者が筆記試験一発勝負での失敗のリスクを避けるために推薦・AO入試を受ける可能性もある。また、実施時期の違いから、時間選好率が高い者が受験を早く終わらせるためにこれらの入試を選ぶことも考えられる。

推薦・AO入試は推し進められている一方、学力低下の要因として否定的に取られる傾向がある。その原因には、大学が推薦・AO入試を導入する目的が、筆記試験で測りにくい面で優秀な学生や大学とのマッチの良い学生の獲得だけではないことがある。優秀な学生の早期の囲い込みや、私立大学では一般入試合格者の入学辞退率が高いことから定員超過・過少の不確実性を低下させるといった目的があるだろう。また、学生が筆記試験入試よりも推薦・AO入試を好む傾向があれば、定員確保のために推薦・AO入試を利用することも考えられる。それぞれの目的がどの程度重要なのかは大学によるが、ここでは大学の入試難易度により異なる可能性を考える。

今の日本は少子化が進み、大学全入時代と呼ばれている。日本私立学校振興・共済事業団「私立大学・短期大学等入試志願動向」によれば、定員

を確保できない私立大学の割合は2000年頃から上昇し始め、2000年代後半から2016年度に入学定員厳格化が始まるまで高い水準で推移している。2008年度には充足率80%未満の大学が27.3%に達している。一般入試で定員確保が難しい大学では推薦・AO入試などの方法で定員を埋めているとも言われる(両角 2016 参照)。一般入試と比較して推薦・AO入試は学力評価の比重が低いため、定員確保のための推薦・AO入試を用いて入学した学生には本来進学には十分な学力が伴っていない可能性もある。このような定員確保という目的は偏差値の低い大学で顕著である可能性が高い。定員割れている大学の割合は偏差値が低い方が大きい(浦田 2006; 舞田 2014a, 2014b 参照)。また、2020年度大学入試情報によると、偏差値50以下の学部を持つ大学のうち、推薦入試(AO入試)がある偏差値50以下の学部を持つ大学は95%(74%)である一方、偏差値50超の学部を持つ大学のうち、推薦入試(AO入試)がある偏差値50超の学部を持つ大学は85%(55%)となっており(小野塚 2020 参照)<sup>1)</sup>、偏差値が低い大学では筆記試験入試のみでの定員確保が難しい状況にいる可能性がある。

ここで、大学は何らかの目的関数を最大化するように筆記試験入試と推薦・AO入試の枠を決めるとしよう。筆記試験入試のみでは定員確保ができないがために推薦・AO入試を用いている場合には、推薦入試やAO入試によって質の良くない学生を入学させてしまっているとしても定員確保のためにはそうするしかない。しかし、入学希望者が多数いる難関大学では、推薦・AO入試を止めたり枠を減らしたりして、その分筆記試験入試で質の良い学生を入学させることができる。つまり、推薦・AO入試入学者と筆記試験入試入学者との差異に大学の入試難易度で違いがみられる可能性がある。

本論文では「第1回大学生の学習・生活実態調査」の個票データを用い、どのような学生が推薦・AO入試を利用して大学に進学しているのかを、出身高校ランクの異質性に着目しながら分析する。より具体的には、高校生の時の特性、大学内外での行動・態度、大学でのパフォーマンスの

3つの切り口で、学業面を中心にその他の面も含めて分析を行う。大学名のデータが公表されていないため、本分析では出身高校の大学進学度に基づく高校ランクでの異質性に注目するが、この異質性は大学の入試難易度によって推薦・AO入試が果たしている役割が異なる可能性に由来する。大学の難易度に着目した分析はほとんど見当たらないが<sup>2)</sup>、推薦・AO入試の現状を理解するには考慮すべきことである。本論文は基本的な記述分析となるが、大学の入試難易度や出身高校の大学進学度・難易度に注目して分析を行ったのは筆者が知る限り本論文が初めてであり、本研究において高校生時点の特性、大学生時点の特性を包括的にまとめることは、今後の大学入試方法の研究のために必要不可欠であると考えている。

結果を簡単に述べておく。まず、出身高校のランクによって学生の推薦・AO入試の利用方法が異なっていることが示唆された。大学進学者が少ない高校ではあまり勉強していなかった者が大学に進学する手段として利用している一方で、難関大学進学者が多い高校ではもともと大学には進学するつもりの方が推薦・AO入試に有利な特性を持っていたという理由で利用している可能性がみられた。彼らは筆記試験で測れない側面、例えば勉学への自発性や社会活動への態度、で筆記試験入学者よりも望ましい傾向を持つことがみられた。ただし、出身校のランクにかかわらず、推薦・AO入試入学者の方が同ランク校出身の筆記試験入試入学者よりも大学の授業に対してまじめな傾向があり、彼・彼女らが大学において学業面や態度で劣っているという証拠はみられなかった。

もちろん、入試方法による大学での態度や成績の違いの分析はこの論文が初めてではなく、社会学や教育学を中心に数多くの分析や報告がされている。特に個々の大学の短い事例報告は多数存在する。例えば加藤(2010)はお茶の水女子大学での、西丸(2010)は同志社大学社会学部での大学の学術成績と入試方法の関係を報告している。結論として言えば、入試方法によって学術成績に明確な差はみられないものが多いように見受けられ

る。学術成績以外では、例えば高橋ほか(2017)は武蔵野大学経済学部経営学科のデータを用い、推薦・AO入試入学者は筆記試験入試による入学者と比較して授業に主体的に取り組む傾向が強いことを示している。渡辺・福島(2008)では、AO入試入学者は入学時付近の学習意欲が高く、入学後の満足度も高い傾向があると先行研究をまとめている。

個別大学ではなく全体の分析をしている研究もいくつか存在する。例えば、中西(2017)は「高校生の進路についての追跡調査」の個票データを使用して入試方法による大学の成績の違いを分析している。浦坂ほか(2013)は独自のアンケート調査を行い、学力試験を課さない制度で入学した者の卒業後の平均年収が、学力試験を課す制度で入学した者のそれよりも低いことを示している。大島(2002)は「学生生活実態調査」の全国65校分のデータ提供を受け、授業内外に関する意識・行動について分析をし、推薦・AO入試(附属高校からの内部推薦を含む)入学者と一般入試入学者で明確な違いはみられなかったとしている。

しかしながらこれらの先行研究は十分だとは言えない。個別大学の分析ではしばしばデータの正確性という利点があるものの、ある大学での結果が他の大学にも当てはまる保証はない上に、今まで報告された事例には国公立大学や難関私立大学のものが多く、全体の傾向を言うことはできない。大学全体の分析は未だ数が少なく、また先行研究にも問題はあり決定的な結論を下すのは難しい<sup>3)</sup>。

本論文の残りの構成は以下の通りである。Ⅱではデータの説明をし、Ⅲで分析を行う。Ⅳで本論文のまとめを述べる。

## Ⅱ データ

本研究では第1回「大学生の学習・生活実態調査」の個票データを使用する<sup>4)</sup>。この調査はインターネット調査で、2008年10月上旬に株式会社ベネッセコーポレーションによって実施された。調査対象は留学生、社会人経験者を除いた18歳から24歳の大学1年生から4年生で、調査の回

答者は、モニター母集団から調査対象者の条件に該当する者のうち、文部科学省『平成20年度学校基本調査（速報）』の男女比・学部系統別の比率を参考にして無作為抽出され、4070人が回答した<sup>5)</sup>。本調査では、高校での学習態度、大学への進学選択、大学の満足度、大学での学習態度・活動など幅広い事柄について尋ねており、本研究において入試方法による学生の違いをさまざまな面で捉えることが可能となる。

そのほか本調査の利点として挙げられるのは、回答者が現在の大学・学部にとどの入試方法で受験したのかを尋ねていることである。本研究ではこの回答を利用して筆記試験入試組と推薦・AO入試組の2つに分ける。筆記試験入試組は、一般入試、もしくは、センター入試と回答した者を含み、推薦・AO入試組は、推薦入試、もしくは、AO入試と回答した者を含む<sup>6)</sup>。そのほかの入試方法を選んだ者はサンプルから落とす<sup>7)</sup>。先行研究では附属高校推薦を他の推薦入試と区別していない場合が多いが、附属高校推薦は附属高校の役割や設置の話に関連し、本研究が焦点を当てたい大学入試制度の範疇を超えてしまうため、本研究では他の推薦入試と区別してサンプルから落としている。

卒業した高校名や通学している大学名のデータは残念ながら公表されていないが、卒業した高校では卒業後にどのような進路を選ぶ人が多いのかを調査で尋ねている。そこでこの質問を用いて出身高校ランクの変数を作成する。ここでは、「国立大学や難関私立大学への進学者が多い」を選んだ者を高位高校出身者、「中堅レベルの大学への進学者が多い」を選んだ者を中位高校出身者、「短大や専修・専門学校への進学者が多い」もしくは「就職や就職希望者が多い」を選んだ者を低位高校出身者と定義する。

なお、大学での専攻分野を芸術系統と回答した者は分析サンプルから落としている。これは、芸術系統は一般的な他の学部系統と比べて求められる資質や技能が大きく異なるためである。ただし、いわゆる「スポーツ推薦」で進学した者や、「文化推薦」だが芸術系統以外の学部系統に進学した者はこの調査では区別できず、サンプルに含

まれたままであることには注意が必要である。

そのほか分析に用いた質問に回答していない者をサンプルから落とした結果、分析サンプルのサイズは3740人となった。

### Ⅲ 分 析

高校生時点での特性、大学内外での態度・活動、大学でのパフォーマンス、という大きく3つの切り口から記述分析を行う。それぞれについて、学業面を中心としたさまざまな面で、入学に利用した大学入試方法によって学生に違いがみられるか、そして出身高校ランクによってその違いに異質性がみられるかを分析する。

もちろん、出身高校ランクと進学先大学の難易度は一対一に対応していない。高位高校の者でも難易度の低い大学に進学する者もいるし、逆に低位高校の者で難関大学に進学する者もいる。そのため、ここでの分析ではそれぞれの難易度の大学がどのような学生を推薦・AO入試、筆記試験入試で獲得しているのかを結論づけることはできない。ただ、出身高校ランクと進学先難易度には正の相関があり、平均的にみれば、高位高校の者は難関大学に進学し、低位高校の者は難易度の低い大学に進学する。利用入試方法にかかわらず、高位高校の者は難関大学に、低位高校の者は難易度の低い大学に平均的に進学すると仮定すれば、本分析でみられる出身高校ランクによる学生の異質性はそのまま大学難易度による学生の異質性となる。各入試方法の募集人員割合の関係から、実際にこのような仮定が成り立つか確かなことは言えず、出身高校ランクと進学先大学難易度の両方を備えたデータを用いて両者の関係を明らかにすることは将来的に取り組まれるべきことである。

本論文では出身高校ランクを所与としてどのような学生が推薦・AO入試を利用しているかを示しているが、調査の回答者は大学生のため、大学に進学しなかった者との比較はできない。つまり、各入試方法の枠の大きさが変わった場合にどのような人が各入試方法で進学するのかを本研究から結論付けるのは難しい。また、本研究では推薦・AO入試だからこそ現在の大学に進学したの

か、たとえ推薦・AO入試でなく筆記試験入試だったとしても同じ大学に進学したのかはわからない。よって、本分析における大学内外での態度・活動及び大学でのパフォーマンスの違いは、推薦・AO入試により学生と大学のマッチが変わったこと、そのようなマッチの変化は関係なしに元々異なる性質を持つ学生が推薦・AO入試に惹き付けられたことの両方から引き起こされていると考えられる。それについては本節の4で少し詳しく述べる。

なお、以下の分析では性別を制御していないが、性別を制御しても同様の結果が得られる。

### 1 高校生時点での特性

表1は出身高校ランク別にそれぞれの入試組の割合を示している<sup>8)</sup>。推薦・AO入試組の割合は出身高校ランクと反比例している。低位校出身大学生のうち60%近くが推薦・AO入試組であり、推薦・AO入試は低位校出身者にとっては大学に進学するための一般的な方法となっているのがわかる。しかし一方で、割合は低くなるが、中位校や高位校といった大学進学に十分な学力を持っていると思われる層でも、推薦・AO入試を利用している者はある程度存在する<sup>9)</sup>。

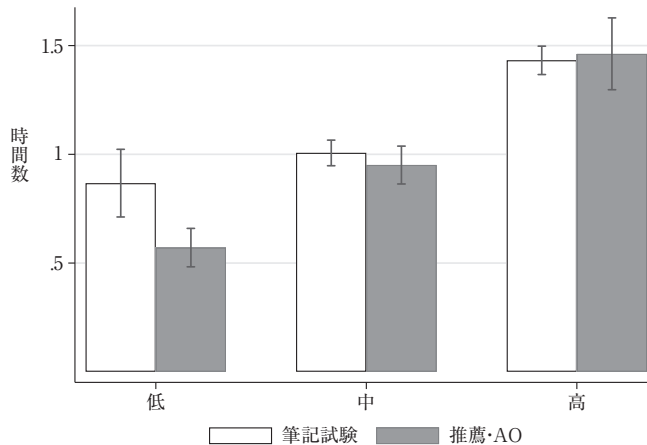
まず勉強面に注目する。使用した調査では、高校1・2年生の時の学校での授業以外の平日1日の勉強時間数を尋ねている。筆記試験入試組の平

表1 出身高校レベル別、入試組割合

	出身高校ランク			計
	低	中	高	
筆記試験入試組	207	1,157	1,396	2,760
	42%	70%	87%	74%
推薦・AO入試組	283	486	211	980
	58%	30%	13%	26%
計	490	1,643	1,607	3,740
	100%	100%	100%	100%

均は1.2時間、推薦・AO入試組は1時間で、推薦・AO入試組のほうが有意水準1%で有意に短い。しかし出身校レベル別になると非常に興味深い結果がみられる。図1が示すように、筆記試験入試組と推薦・AO入試組の平均勉強時間の差には出身校ランクで違いがある。低位校出身者の間では、筆記試験入試組が0.9時間、推薦・AO入試組が0.6時間と、推薦・AO入試組のほうが確かに有意に短い、その差は出身校ランクが上がると共に小さくなり、高位校出身者の間では、筆記試験入試組が1.4時間、推薦・AO入試組が1.5時間と、差は有意ではないものの、数値では推薦・AO入試組のほうが長い。全体平均で推薦・AO入試組の勉強時間が筆記試験入試組よりも短いのは、出身校ランクと勉強時間には正の関係性があることと、推薦・AO入試組のほうが筆記試験入試組よりも低いランクの高校出身の学生割合が高いことが理由であるのがわかる。

図1 出身高校ランク・入試方法別、高校1・2年生時の平均の平日1日勉強時間数(学校での授業以外)



注：Iは95%信頼区間を示す。

次に大学受験対策に関する態度や行動をみる。図2が示すように、受験対策開始時期は高校ランクが上がるにつれて早まる傾向がある。筆記試験入試組と推薦・AO入試組の違いとしては、低位校では推薦・AO入試組のほうが対策を始めた時期が遅い一方、その差は高校のランクが上がるにつれ小さくなり、高位校出身者では推薦・AO入試組のほうが早めに対策を始めたことがわかる。

また、図3では推薦・AO入試組がどのような受験対策に取り組んだのかを示している<sup>10)</sup>。もちろん推薦・AO入試準備に取り組んだ者の割合

はどのランクの高校出身でも高い。しかし、低位校の場合は90%、高位校の場合は78%と、ランクが高いほどその割合は低くなっている。そして筆記試験入試準備については出身校レベルによって大きな差がみられる。低位校出身者の場合は32%と半分以下の者しか取り組んだと回答していないが、高位校出身者では67%の者が取り組んだと回答している。低位校出身者では推薦・AO入試での大学進学しか考えていなかった者も一定程度存在する一方で、高位校出身者では多くの者が大学には何かしらの入試方法で進学する予定で

図2 出身高校ランク・入試方法別、大学受験対策開始時期

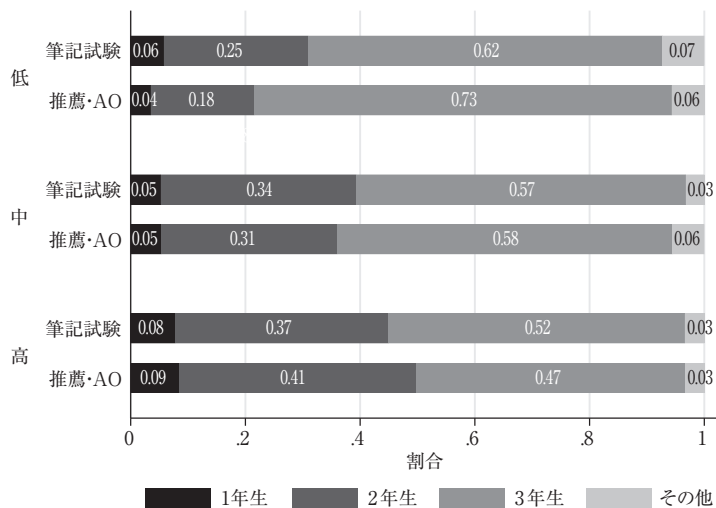
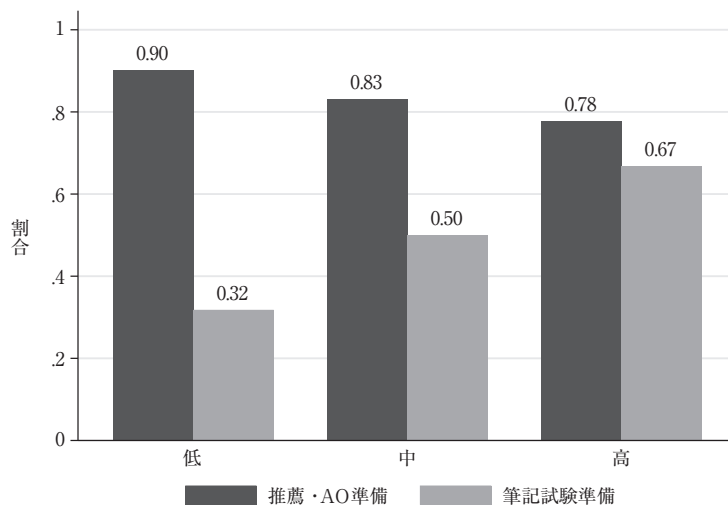


図3 出身高校ランク別、大学受験対策で取り組んだと回答した者の割合：推薦・AO入試組



あったことが示唆される。

## 2 大学内外での態度・活動

本項では大学内外での態度や活動について述べる。まず大学への満足度として、調査時において他大学に入りなおしたいと思う頻度を4段階で回答したものを使う。これについては学年とともに変化をする可能性があるため、他大学に入りなおしたいと思う頻度を被説明変数、定数項、推薦・AO入試組ダミー、学年ダミーを説明変数として出身校ランク別に順序ロジットモデルで推定を行う(表2)。推定結果によると、出身校ランクにかかわらず、推薦・AO入試組の方が他大学に入りなおしたいと思う頻度が有意に少ない傾向がある。大学への熱意・満足度については、志望大学のランクを落としてでも推薦・AO入試で早期に

受験を終えたり、大学入学後に大学とのマッチが悪いと気づいたりする可能性があるため、推薦・AO入試入学者の方が必ずしも高くなるわけではないが、推定結果からすると、基本的には推薦・AO入試は実施時期が早いことや面接などによって大学への熱意が高い者を選別できていると言えるだろう。

次に、勉強面での態度・取り組みについて、出身高校ランク別、入試方法別に違いがあるのかを確認する。利用している調査では、大学の授業への取り組みに関する26項目について回答者自身が4段階で評価をしている。これらの項目から双方向性、まじめさ、自発性という3つのグループにそれぞれに対応するものを選び、それらの平均値を3つの指標とする。指標の作成に使用した項目は付表パネルAに提示する。作成された指標は平均0、標準偏差1に標準化する。

表3のパネルAでは、それぞれの指標を定数項、推薦・AO入試組ダミー、学年ダミー、理系ダミーへと出身校ランク別に回帰した結果を示す。まじめさについてはどの出身校ランクでも推薦・AO入試組のほうが有意に高い数値である。特に低位校出身者では非常に大きな差がみられる。授業で求められることを超えて自発的に勉強するかについては、高位校出身者でのみ、推薦・AO入試組の方が筆記試験入試組よりも有意に値

表2 出身高校ランク別、他大学に入りなおしたいと思う頻度(順序ロジット)

	低	中	高
推薦・AO入試組	-	--	-
2年生	ns	+	ns
3年生	ns	ns	ns
4年生	ns	ns	ns

被説明変数: 0: 全くない, 1: あまりない, 2: たまにある, 3: よくある  
+++: 1%水準で正に有意, ++: 5%水準で正に有意, +: 10%水準で正に有意

--: 1%水準で負に有意, -: 5%水準で負に有意, -: 10%水準で負に有意

ns: 両側10%水準で非有意

表3 出身高校ランク別、大学の授業への取り組みの推薦・AO入試組ダミーへの回帰

A	低			中			高		
	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性
推薦・AO入試組	0.0981 (0.1004)	0.4270*** (0.1015)	0.0193 (0.0996)	-0.0638 (0.0534)	0.1015* (0.0529)	0.0047 (0.0530)	0.0712 (0.0721)	0.1827** (0.0729)	0.1505** (0.0736)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済みR <sup>2</sup>	0.0008	0.0296	-0.0085	0.0014	0.0004	-0.0013	-0.0008	0.0019	0.0015

説明変数: 定数項, 学年ダミー, 理系ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

### B: 進学時満足度ダミーを含む

	低			中			高		
	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性
推薦・AO入試組	0.0036 (0.1036)	0.3300*** (0.1038)	-0.0359 (0.1030)	-0.1106** (0.0539)	0.0719 (0.0536)	-0.0452 (0.0534)	0.0267 (0.0727)	0.1411* (0.0739)	0.1162 (0.0746)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済みR <sup>2</sup>	0.0173	0.0615	0.0039	0.0202	0.0132	0.0190	0.0137	0.0079	0.0076

説明変数: 定数項, 学年ダミー, 理系ダミー, 進学時満足度ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

が高い。意外なことに双方向性についてはどの出身校ランクでも入試方法による差は有意ではない。

この結果には、推薦入試やAO入試で授業に対してまじめな者や自発的に勉強する性質を持った者が合格したというだけでなく、大学への熱意や満足度が影響している可能性も考えられる。望んでいた大学に入れた者のほうがやる気を持って真剣に大学での勉学に取り組んでいる可能性を調べるため、先ほどの回帰式の説明変数に進学時の満足度ダミーを加えたものを推定する(パネルB)<sup>11)</sup>。高位校出身の推薦・AO入試入学者の自発性は有意ではなくなったが、まじめさに関しては、ダミーを加えることで推薦・AO入試組ダミーの係数値は低くなるものそれほど大きな変化ではなく、中位校出身者を除き有意のままである。この結果からすると、推薦・AO入試によって、大学への志望度だけでなく、勉学への姿勢についてもある程度選抜できていると考えられる。これは、高校時代の学校成績がこれらの入試方法で合否判断材料の1つに使われるために、普段からまじめに授業に取り組む特性を持つ学生が選抜されているのかもしれない<sup>12)</sup>。

最後に、勉学以外の活動について同様の分析を行う。回答者がサークルや部活動、学校行事やイベント、アルバイト、社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)の4つの項目それぞれについてこれまでの大学生活の中でどのくらい力を入れてきたかを5段階で自己評価したものを用いる。説明変数には定数項、推薦・AO入試組ダミーの他に、学年ダミー、理系ダミーを加え、順序ロジットモデルで推定する。表4は推薦・AO入試組ダミーの係数推定値が有意かどうかをまとめている。高位校出身者でのみ、推薦・AO入試組のほうが学校行事やイベント、社会活動に力を入れたという結果がみられる。先ほどと同様に高位校出身者の学校行事やイベントと社会活動について進学時の満足度ダミーも説明変数に加えて推定すると、学校行事やイベントでは推薦・AO入試組ダミーの係数が小さくなり有意でなくなる(表は省略)。難関大学では推薦・AO入試で大学への熱意が高い者を受け入れることで大学での行

表4 出身高校ランク別、これまでの大学生活の中でどのくらい力を入れてきたか(順序ロジット): 推薦・AO入試組ダミー係数

	低	中	高
サークルや部活動	ns	ns	ns
学校行事やイベント	ns	ns	++
アルバイト	ns	ns	ns
社会活動	ns	ns	+++

+++: 1%水準で正に有意, ++: 5%水準で正に有意, +: 10%水準で正に有意

ns: 両側10%水準で非有意

説明変数: 定数項, 推薦・AO入試組ダミー, 学年ダミー, 理系ダミー

事ごとを活性化できているのかもしれない。一方で社会活動では進学時満足度ダミーを入れても推薦・AO入試組ダミーの値はほぼ変わらず、正に有意である。難関大学では、筆記試験では測りにくいこのような面での評価が重視されているのかもしれない。

### 3 大学でのパフォーマンス

分析の最後に大学でのパフォーマンスを確認する。まずはスキル成長に関する自己評価を利用する。調査では、28項目について大学生活全体を通じてどの程度身についたと思うかを回答者自身に4段階で評価してもらっている。これらの項目から認知、非認知、対人のグループに対応するものをそれぞれ選び平均値を取って3種類のスキルの成長の指標を作成する。指標の作成に使用した項目は付表パネルBに示す。作成された各指標は平均0、標準偏差1となるように標準化する。

表5パネルAでは、それぞれのスキルの伸びの指標を定数項、推薦・AO入試組ダミー、学年ダミー、理系ダミーへと、出身校ランク別に回帰した結果を示す。低・中位校出身者では入試方法による違いはどのスキルにおいても有意ではない。一方、高位校出身者ではすべてのスキルについて推薦・AO入試組の方が身についた具合が有意に高くなっている。大学を通してのスキルの伸びを表すものとして最終学年である文系4年生及び理系4年生に条件付けした期待値を示す(パネルB)。どの指標でも高位校出身者は他のランクの出身者と比べスキルの伸びが大きい傾向があるが、推薦・AO入試組は筆記試験入試組よりも更



表5 出身高校ランク別、大学生生活全体を通じてのスキルの伸び

A	低			中			高		
	認知	非認知	対人	認知	非認知	対人	認知	非認知	対人
推薦・AO入試組	0.0730 (0.1055)	0.0749 (0.1040)	0.0267 (0.1059)	-0.0735 (0.0531)	-0.0372 (0.0532)	-0.0239 (0.0527)	0.1851*** (0.0710)	0.2181*** (0.0718)	0.1800** (0.0706)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済み R <sup>2</sup>	0.0009	-0.0052	0.0015	-0.0004	0.0022	0.0230	0.0033	0.0032	0.0084

説明変数：定数項、学年ダミー、理系ダミーも含む  
 \*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

**B: 条件付き期待値**

文系4年生									
推薦・AO入試組	-0.3116	-0.1745	-0.1913	-0.1171	-0.0124	0.0375	0.2682	0.3028	0.3501
筆記試験入試組	-0.3864	-0.2518	-0.2177	-0.0400	0.0233	0.0676	0.0839	0.0846	0.1657
理系4年生									
推薦・AO入試組	-0.1784	-0.2313	-0.3906	-0.0860	-0.1540	-0.2841	0.3500	0.2734	0.1905
筆記試験入試組	-0.2532	-0.3086	-0.4171	-0.0088	-0.1183	-0.2540	0.1657	0.0522	0.0061

に0.2標準偏差ほど伸びが大きい。高難易度の大学では推薦・AO入試によって優秀な学生を獲得している可能性を示している。ただし、ここでのスキルの伸びは自己評価なので、推薦・AO入試組がスキルの伸びを過大評価している可能性には注意が必要である。

調査ではこれまでの大学の成績についても尋ねている。大学でのGPAを定数項、推薦・AO入試組ダミー、学年ダミー、理系ダミー、国公立大ダミー、非GPA成績評価ダミーへと出身校ランク別に回帰したところ<sup>13)</sup>、推薦・AO入試組ダミーは低位高校出身者で10%水準で正に有意ではあるが、他のランクの高校出身者では有意でない(表は省略)。個別大学を扱った多くの先行研究と同様、全体的には利用入試方法と大学での成績にあまり強い関係はみられない。

ここまでの結果では、同ランク校出身者間で、推薦・AO入試組の方が筆記試験入試組よりもパフォーマンスが劣るという証拠はないといえる。ただし、GPAの回帰式では大学での評価基準の違いを十分に制御できていない可能性があることや、GPAと先ほどのスキルとの関係性も不透明なことから、大学でのパフォーマンスに関してはより客観的で正確な指標を用いての検証が将来的に必要である<sup>14)</sup>。

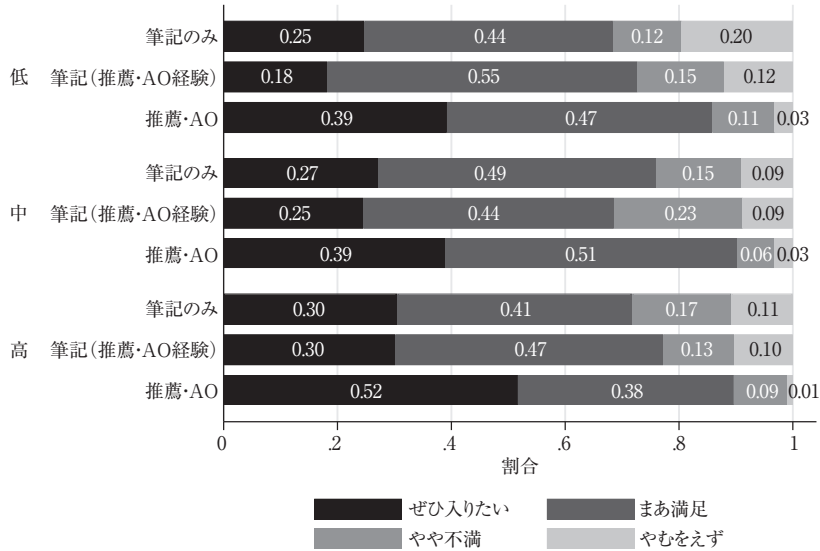
#### 4 入試方法による学生の違いをもたらす要因

高位校出身の推薦・AO入試組は同ランク校出

身の筆記試験入試組と比較して大学でのスキルの伸びが大きいとした場合、スキルの伸びの違いには2つの経路が考えられる。1つは推薦・AO入試によって学生がよりマッチの良い大学に進学したこと、もう1つは入試方法による大学とのマッチの変化とは関係なしに元来異なる特性を持つ学生が推薦・AO入試に惹き付けられたことである。この2つの経路の識別には入試方法決定へ影響する外生的変動が必要であり、本研究ではデータの制約上行うことが難しい。それにもかかわらず、本項ではそれぞれの可能性について述べる。

本調査では全体でどのような入試方法を経験したかも尋ねている。これによると、筆記試験入試組のうち12%(低位校出身者で16%、中位校出身者で14%、高位校出身者で10%)が推薦・AO入試(附属高校推薦を除く)を経験している。彼らが推薦・AO入試で志望した大学と実際に筆記試験入試で進学した大学の違いは利用データではわからない。しかし、進学時の大学への満足度をみると、推薦・AO入試を経験した筆記試験入試組の満足度は推薦・AO入試組よりも低く、推薦・AO入試を経験しなかった筆記試験入試組と比較して同程度か低いことがわかる(図4)。ここから、推薦・AO入試に落ちた者の多くは推薦・AO入試で受験した大学とは異なる大学に筆記試験入試で進学していることが推察される。推薦・AO入試で合格して進学した者の中にも、推薦・AO入試だから現在の大学に進学できたのであ

図4 出身高校ランク・入試方法別、進学時の満足度



て、筆記試験入試では異なる大学に進学したであろう者も少なくはないと予想される。

なお、推薦・AO入試だからこそ達成された大学と学生のマッチがどれほど学生の大学でのパフォーマンスに違いを及ぼしたのかはわからない。高位校出身者で推薦・AO入試を経験した者に絞って表5と同様の回帰を行うと、スキルの伸びの自己評価は入学に利用した入試方法によって有意な差はみられない(表6)。つまり、先ほどみられたスキルの伸びの違いは、推薦・AO入試を受けるような人が元々そのような素質を持っていたことが原因かもしれない。ただ、推薦・AO入試で落ちた者は合格した者と比較してレベルの高い大学を受験していた、つまり元々更に優秀であったことも考えられる。今後より詳しい分析が必要である。

表6 大学生生活全体を通じてのスキルの伸び  
(高位校出身、推薦・AO入試経験あり)

	認知	非認知	対人
推薦・AO入試組 <sup>(注)</sup>	0.0342 (0.1022)	0.0793 (0.0449)	0.0525 (0.1041)
観測数		347	
調整済み R <sup>2</sup>	-0.0061	0.0034	0.0089

説明変数：定数項、学年ダミー、国公立大ダミー、理系ダミーも含む  
サンプル：筆記試験入試入学者(推薦・AO入試経験あり)と推薦・AO入試入学者

注：参照グループ：筆記試験入試組(推薦・AO入試経験あり)

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

#### IV まとめ

「誰が大学に行くのか」と「誰がどこの大学に行くのか」を決める大学入試は、大学進学を希望する学生にとっての一大イベントであるだけではなく、学生と大学の間に補完性がある限り人材育成の観点から社会にとっても重要な話題である。日本の大学入試方法は、筆記試験によって合否を決める筆記試験入試と、筆記試験入試よりも早く行われ、調査書、志望動機書、面接などを通じて多面的・総合的に学生を評価する推薦・AO入試の2つに大きく分けられる。つまり、学生の評価軸と試験実施時期の両方で異なる入試方法が並立している。

本論文では、第1回大学生の学習・生活実態調査の個票データを用い、高校生の時の特性、大学内外での態度・行動、そして大学のパフォーマンスと言う3つの観点から、学業面を中心としたさまざまな面で筆記試験入学者と推薦・AO入試入学者の違いについてまとめた。本研究が先行研究と大きく違う点は、大学進学度に基づいた出身高校ランクによる異質性に着目をしたところである。大学名のデータが公表されていないため分析では出身高校ランクによる異質性に着目したが、この異質性は大学入試難易度により推薦・

AO入試の役割が異なることから生じると考えている。推薦・AO入試が果たす役割が大学の入試難易度によって異なる可能性は今までに全く指摘されてこなかったわけではないが、その異質性により入試方法による学生の違いがどう異なるかをデータで示した研究は今までなかった。

記述分析の結果、学生が推薦・AO入試をどのように利用しているかが出身高校のランクによって異なっている可能性が示唆された。低位高校では高校時代にあまり勉強していなかった者が大学に進学する手段として利用している一方、高位高校ではもともと大学には進学するつもりの方が推薦・AO入試に有利な特性を持っていたという理由で利用しているという姿が浮かび上がった。そして、高位校出身の推薦・AO入試入学者の場合は授業で求められたこと以上に勉学に取り組み、学校行事やイベント、社会活動に力を入れている傾向がみられた。そして、認知、非認知、対人のすべてのスキルにおいて大学で伸びたと感じている具合が筆記試験入試入学者より高かった。難関大学では勉学への自発性や社会活動への態度といった、筆記試験で測れない面で望ましい特性を持つ者を推薦・AO入試によって獲得できている可能性がある。大学入試方法の分析の際には大学難易度による異質性を考慮する必要がある。

しかし同時に、分析結果からは推薦・AO入試入学者が筆記試験入試入学者と比べて学業面や態度で劣るという証拠はみられなかった。出身高校ランクにかかわらず、推薦・AO入試入学者は同じランクの高校出身の筆記試験入試入学者と比較して大学には満足している傾向があった。更に、彼・彼女らは大学の授業にまじめに取り組む傾向がみられた。低・中位校出身者では、大学入学時点で筆記試験入学者よりも学力・能力が低かったとしてもその差がまじめさで埋められている可能性がある。推薦・AO入試が大学生の学力低下の要因だと社会的に評価されがちなのはこれらの入試が偏差値の低い大学の方でより広まっていることが影響している。確かに、推薦・AO入試によって学力の低い学生が大学に進学しているのは事実だが、偏差値の低い大学で推薦・AO入試を廃止してすべて筆記試験入試にしても、現在より

も良い学生を獲得できるかは不明である。

大学の難易度や高校のランクと大学入試方法に注目したデータ分析が見当たらなかったため、本論文はまず第一歩としての基本的な記述分析となっており、今後更なる研究が考えられる。ただ、研究が進んでいくためにはデータの拡充が不可欠である。本論文でそれぞれの大学入試方法が異なる特性を持つ学生を惹き付けていることが示されたが、これは必ずしも異なる種類の入試方法が存在することで学生と大学のより良い組み合わせが達成されたことを示しているわけではない。推薦・AO入試入学者はたとえ推薦・AO入試でなかったとしても同じ大学に進学した可能性があるし、異なる大学に進学していたとしてもその後のパフォーマンスに違いがない可能性もある。通常、推薦・AO入試の方が筆記試験入試よりも大学側にコストがかかるため、これらの導入により学生と大学のより良い組み合わせが達成されているのかは、効率性の観点から社会的に重要な問いである。この重要な問いに答えるには学校や学生についてのより詳細なデータが必要である。

そして、本論文では2008年のデータを用いたが、現状を正確に把握するには新しいデータを用いた分析が必須である。また、本研究で用いた指標の質は高いわけではなく、より説得的な分析には学力の客観的な指標などが必要となる。本研究で分析できなかった、卒業後についての分析も今後行われる必要がある。入試方法によって大学でのパフォーマンスに差がみられなかったとしても、卒業後の就職や賃金などに違いがある可能性もある。大学入試に対する社会での高い注目度・重要度にもかかわらず、現時点では入試方法の情報を集めている調査が少ない。今後のデータのより一層の充実が望まれる。

\*本稿はRIETI DPとして発表したものを基にしている。本稿原案に対して、2名の匿名査読者、恩田正行氏、川口大司氏、小樽商科大学、九州大学、経済産業研究所のワークショップ、東京労働経済学研究会、2021年度日本経済学会春季大会の参加者から有益なコメントを頂いた。ここに謝意を表す。本研究はJSPS科研費JP21K13309の助成を受けたものである。

- 1) ここで示されているのは推薦入試、AO入試がある学部を持つ大学数であって、入学数ではないことには注意が必要である。偏差値別、大学入試方法別の入学数をまとめたものは私が知る限りない。
- 2) 中村 (1997) は推薦入試について大学入試難易度による違いを指摘している。
- 3) 例えば、中西 (2017) はパネルデータを利用しているが、サンプル脱落によってサイズが非常に小さい。浦坂ほか (2013) は大学のレベルを制御していない。
- 4) 二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「大学生の学習・生活実態調査, 2008」(ベネッセ教育総合研究所)の個票データの提供を受けた。
- 5) 『学校基本調査』と比較した回答者の基本属性についてはベネッセコーポレーション (2009) を参照。
- 6) 本研究の分析サンプルでは、筆記試験入試組のうち約8割が一般入試、推薦・AO入試組の約8割が推薦入試と回答している。
- 7) 帰国生入試、編入学、その他、の入試方法は、他と大きく異なり、また人数も少ないことからサンプルから落とす。
- 8) 文部科学省の統計と比較して推薦・AO入試入学者の割合が少ない。これは本研究では附属高校推薦での進学者を除いているのと、元々の調査回答者のうち私立大学に在籍している者の割合が文部科学省の統計よりも少ないことが関係していると思われる。
- 9) 推薦・AO入試組における推薦入試入学者、AO入試入学者の割合は出身校ランクによって違いがあり、AO入試入学者の割合は、高位校出身者では21%、中位校出身者では17%、低位校出身者では13%である。推薦入試入学者に絞って分析も行ったが、基本的には同様の結果を得た。
- 10) 推薦・AO準備は、小論文の準備、志望理由書・自己推薦書作成、面接の準備、プレゼンテーション・ディスカッション、実技を含み、筆記試験準備は、センター試験に対応した教科学習、国公立二次試験に対応した教科学習、私立大学入試に対応した教科学習を含む。センター試験に対応した教科学習を除いても同様の傾向を得る。
- 11) 進学時満足度ダミーは、ぜひ入りたい、まあ満足、やや不満、やむをえず、の4つのカテゴリからなる。
- 12) 中位校出身者では双方向性が有意に負であるが、どのレベルの出身者でも推薦・AO入試で特段双方向性が高い者が選ばれていないことから(パネルA)、入試において進学時の熱意を制御した上でその受験生が双方向的かどうかは判断していない(できていない)ために生じたのではないと思われる。
- 13) 大学によって成績評価制度が異なり、回答者は4段階評価の各評価の割合またはGPAで回答している。ここでは4段階評価で回答されたものについてはGPAへと変換して利用する。
- 14) 例えば、先ほど高位校出身者では推薦・AO入試組の方がスキルの伸びが大きかったがGPAでは差がみられないことがあ

る。ここでスキルとGPAが測っているものがあまり対応していないなど、いくつかの可能な理由が考えられるが、これらの可能性を検証するにはデータが不十分であり結論を出すことはできない。

#### 参考文献

- 浦坂純子・西村和雄・平田純一・八木匠 (2013) 「大学入試制度の多様化に関する比較分析——労働市場における評価」 *RIETI Discussion Paper Series*, 13-J-019.
- 浦田広朗 (2006) 「私大の定員割れとファンディング 教育支援型財務の確立を」『教育学術新聞』2006年9月20日.
- 大島真夫 (2002) 「推薦入学方式で入学する学生の意識と行動——一般入試入学者との比較から」『全国大学生生活協同組合連合会『学生生活実態調査』の再分析』第5章.
- 小野塚祐紀 (2020) 「誰が入学しているのか——大学難易度と推薦・AO入試の役割」 *RIETI Discussion Paper Series*, 20-J-039.
- 加藤敬子 (2010) 「お茶の水女子大学 AO入試の現状」『高等教育と学生支援』Vol. 1, pp. 37-48.
- 高橋大樹・渡部博志・積田淳史・穴戸拓人 (2017) 「入試選抜方法と学修プロセス——大学への適応・授業への取り組み・教員のサポートに対する知覚の観点から」『武蔵野大学政治経済研究所年報』Vol. 15, pp. 263-302.
- 中西啓喜 (2017) 「国立大学は推薦・AO入試によって『成績優秀な学生』を獲得できているのか?——エリートセクターにおけるマス選抜の導入」『高等教育ジャーナル——高等教育と生涯学習』Vol. 24, pp. 63-74.
- 中村高康 (1997) 「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究——選抜方法多様化の社会的分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』Vol. 37, pp. 77-89.
- 西丸良一 (2010) 「入学者選抜方法による大学の学業成績——同志社大学社会学部を事例に」『同志社大学教育開発センター年報』Vol. 1, pp. 16-25.
- ベネッセコーポレーション (2009) 「大学生の学習・生活実態調査報告書」『研究所報』Vol. 51.
- 舞田敏彦 (2014a) 「大学の定員充足率の分布 (2014)」『データえっせい』2014年10月2日, <http://tmaita77.blogspot.com/2014/10/2014.html> (2021年8月15日アクセス).
- (2014b) 「大学の偏差値と定員割れ」『データえっせい』2014年10月14日, [http://tmaita77.blogspot.com/2014/10/blog-post\\_14.html](http://tmaita77.blogspot.com/2014/10/blog-post_14.html) (2021年8月15日アクセス).
- 両角亜希子 (2016) 「どのような大学が多面的な入試改革を導入するのか——入試制度に関する学長調査」『カレッジマネジメント』No. 197, pp. 18-23.
- 渡辺哲司・福島真司 (2008) 「公表データからみるAO入学者の評価——国公立16大学からの追跡調査報告レビュー」『大学入試研究ジャーナル』Vol. 18, pp. 131-136.

付表 指標作成に使用した項目

**A: 大学での授業への取り組み**

**双方向性**

クラスの全員の前で、積極的に質問や発言をする；グループワークやディスカッションで自分の意見を言う；グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する；グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする；グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する；グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する

**まとめさ**

授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する；授業に遅刻しないようにする；履修登録した科目は途中で投げ出さない；授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる；授業中に私語をしない；授業で出された宿題や課題はきちんとやる；レポートやテストを提出する前に見直す；授業で配布された資料などを整理する；できるかぎり良い成績をとろうとする

**自発性**

自発性：授業の予習をする；授業でわからなかったことは先生に質問する；授業の復習をする；授業でわからなかったことは、自分で調べる；授業で興味をもったことについて自主的に勉強する；授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する；グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する；資格や勉強の学校などに通って勉強する；計画を立てて勉強する；自分の意思で継続的に勉強する

**B: 大学生生活でのスキル成長**

**認知**

異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる；自分の知識や考えを文章で論理的に書く；自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する；コンピュータを使って文章・発表資料を作成し表現する；外国語で読み、書く；外国語で聞き、話す；文献や資料にある情報を正しく理解する；コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする；多様な情報から適切な情報を取捨選択する；ものごとを批判的・多面的に考える；現状を分析し、問題点や課題を発見する；問題を解決するために、数式や図・グラフを利用する；仮説の検証や情報収集のために、実験や調査を適切に計画・実施する；筋道を立てて論理的に問題を解決する；既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出す；幅広い教養・一般常識を身につける；専門分野の基礎的な知識・技術を身につける

**非認知**

進んで新しい知識・能力を身に付けようとする；自分で目標を設定し、計画的に行動する；自分の感情を上手にコントロールする；自分の適性や能力を把握する；自分に自信や肯定感をもつ

**対人**

人と協力しながらものごとを進める；自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる；異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる；社会や文化の多様性を理解し、尊重する；国際的な視野を身につける；社会の規範やルールにしたがって行動する；社会活動（ボランティア、NPO 活動などを含む）に積極的に参加する

〈投稿受付 2020 年 11 月 24 日，採択決定 2022 年 2 月 18 日〉

おのづか・ゆうき 小樽商科大学商学部経済学科准教授。  
最近の論文に“Essays on College Majors and Skills,”Ph.D. Thesis, University of Western Ontario (2019 年)。労働経済学、教育経済学専攻。